

男体山登拝今昔

なんたいさんとうはいいまむかし

栃木県埋蔵文化財センター 篠原祐一



男体山頂の太郎山神社
奥の巨岩で祈りが捧げられた。

日光連山の主峰、男体山。毎年、7月31日から8月7日までの期間、お山は登拝祭で賑わう。私もかつては2時間半で奥の宮に詣でたが、過日大学の先生達と登拝した時は、その倍かかった。

男体山の頂上は三日月型の火口壁になっていて、奥の宮はそ

の西寄り、東は女峰山につながる稜線となる。そして、最西端は高さ約30mの巨岩であり、岩の上には太郎山神社が鎮座する。

案外、知られていないことであるが、この場所こそ、東国随一と称され、山の正倉院とまで言われる男体山頂遺跡である。

男体山頂遺跡からは、メノウの石帶が見つかっている。メノウは四位（水戸黄門は従三位）中納言だから、その下の位）に許されているものである。

古代の下野国司（国から派遣された栃木県知事）は五位が普通で、数人しか四位の人は任命されていない。状況証拠から、

さることながら、鐵板で作った馬（奈良・平安時代では男体山のみの出土）

あまり注目されない出土品に、古代役人が正装の時だけ身につけたベルトの飾りがある。石帶という石を磨いた飾りなのだが、身分によって使って良い石材が決められている。

男体山頂遺跡からは、メノウの石帶が見つかっている。メノウは都（今の京都）にあった平安京でしか使われないものだから、都から派遣された国司しか知らないものである。馬は雨乞いに用いられるので、807年（大同2）に勝道上人が行つた雨乞いに、国司が持たせたものであろう。

また、全国でも貴重な鐵板で作った馬も出土している。これは都（今の京都）にあった平安京でしか使われないものだから、都から派遣された国司しか知らないものである。馬は雨乞いに用いられるので、807年（大同2）に勝道上人が行つた雨乞いに、国司が持たせたものであろう。

男体山頂遺跡は、昭和34年に発掘調査が行われ、出土品は国の重要文化財に指定されている。出土品は、飛鳥時代から現代のもので、特に奈良・平安時代のものは、国宝に指定されてもおかしくないほどの秀品揃いである。

では、なぜ、こんな高い山の頂上に、遺跡があるのであろう

か。現在は、中禅寺湖畔からの登山であるが、古代はそこまでも徒歩である。何日もかけて、様々なものを背負つて、命がけで頂上を目指した理由は何であろうか。



鉄板で作った馬（奈良・平安時代では男体山のみの出土）

る。これも役所の専用品が運ばれていることを示している。

どうも、命がけで頂上を目指した人は、国司から「そちに、

頼む。お山に行つて来てたもお」の言葉があったようである。

それでは、国司にそう言わせたものは何であったのか。

● ● ● ●

つまり、国府からは、神をまつらなければならぬ方位にあるのが男体山であった。だから、それを知っていた奈良時代の国司は、日々、男体山を方位守護神として遥拝していたのである。

● ● ● ●

それは奈良時代の蝦夷地争乱にあると言わってきた。蝦夷の鎮圧のため軍隊を送る時、下野国は後方支援基地であり、白河の関を越えて攻められれば、そのまま前線基地になる。だから、蝦夷地に入る前の靈山に祈りを捧げたとの解釈である。

でも、それだけでは国司が特使を派遣する理由にはなるまい。

● ● ● ●

下野国府は、今の栃木市田村町にあった。そこから男体山は北西の方角にある。

北西は中国の八卦で乾である。乾は鬼門に対する天門で、神や祖先をまつる方角である。また、金星の氣である。

祖先をまつる方角である。また、祖先をまつる方角である。また、金星の氣である。

つまり、国府からは、神をまつらなければならぬ方位にあるのが男体山であった。だから、それを知っていた奈良時代の国司は、日々、男体山を方位守護神として遥拝していたのである。国司は勝道上人を呼び、国家を平和にする鎮護国家の祈祷を依頼する。こうして、平安時代前期の秀品は、山頂に運ばれたのである。

● ● ● ●

国司は勝道上人だという。代表は勝道上人だという。新しく赴任した国司は、靈験あらたかな二荒山神を知る。聞けば、天門の神という。では、戦き届けてくれよう。では、誰を派遣するか。丁度その頃、山の中で修行するお坊さんの一団がある。代表は勝道上人だという。安時代後期の大量の品々は、瞬く間に山頂に運ばれたのである。

● ● ● ●

男体山頂の夏は短い。今、山頂は篤信の老若男女で賑わう。振り返って、千古の昔。重大な使命を帯びた男達が、命がけでたどりつき、そして、祈りを捧げた。

平和を謳歌できる恩寵を、神に感謝しなくてはならない。

(大前神社権禰宜)

平安時代になると、天門の神は陰陽道の神「大將軍」だと考えられた。大將軍は太白星（金星）の精で戦の神である。蝦夷での戦闘が激化する中、



太郎山から見た男体山

新しく赴任した国司は、靈験あらたかな二荒山神を知る。聞けば、天門の神という。では、戦き届けてくれよう。では、誰を派遣するか。丁度その頃、山の中で修行するお坊さんの一団がある。代表は勝道上人だという。安時代後期の大量の品々は、瞬く間に山頂に運ばれたのである。

新しく赴任した国司は、靈験あらたかな二荒山神を知る。聞けば、天門の神という。では、戦き届けてくれよう。では、誰を派遣するか。丁度その頃、山の中で修行するお坊さんの一団がある。代表は勝道上人だという。安時代後期の大量の品々は、瞬く間に山頂に運ばれたのである。

新しく赴任した国司は、靈験あらたかな二荒山神を知る。聞けば、天門の神という。では、戦き届けてくれよう。では、誰を派遣するか。丁度その頃、山の中で修行するお坊さんの一団がある。代表は勝道上人だとい